

アサリ資源の激減と養殖技術開発 ～安全安心な国産アサリを食卓へ～

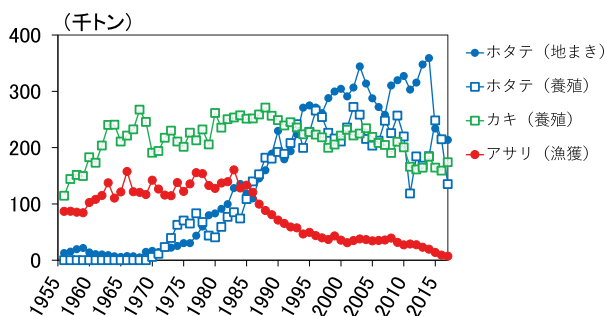
(養殖システム研究センター 増養殖環境グループ：石樋 由香)

アサリは、全国どこのスーパーマーケットにも並ぶ日本人になじみの深い水産物である。アサリの漁獲量は、1980年代中頃までは10～16万トンあったが、1980年代後半から減少し続け、2017年度には7千トンにまで大きく落ち込んでいる。産地別にみると、千葉県では1960年代まで全国漁獲量の約半分の5～8万トンが漁獲されていたが、その後、東京湾の埋め立てにより漁場面積が4分の1となり、大幅に漁獲量が減少した。その減少分を補うように、1970年代には熊本県や福岡県などの有明海、大分県の周防灘での漁獲が伸びた。しかし、これらの地域でも1980年代後半からアサリ資源が激減し、近年では1千トンを割り込んでいる。愛知県では1990年代以降も比較的漁獲量が安定していたが、近年は減少傾向に転じている。アサリ資源の減少には、乱獲、環境の悪化、食害、餌不足など、様々な要因が複雑に絡み合っており、いまだに有効な資源回復策は見つかっていない。

以上のような国内生産の低迷により、輸入されたアサリが消費全体の8割以上を占め、その上、産地偽装の問題も後を絶たない。このままでは、安全安心な国産アサリが日本の食卓から消える日がくるかもしれない。一方、アサリと並んで人気のある二枚貝のカキやホタテガイでは、早くから養殖技術が確立されており、安定した生産を維持している。アサリ

資源の先行きが暗い今、天然資源の回復策だけでなく、アサリを稚貝から育てて収穫する養殖技術の開発が急務といえる。

当機構では、現在、様々なアサリ養殖技術の開発に取り組んでいる。養殖種苗となるアサリ稚貝を得る技術には、親貝から卵を採り水槽内で稚貝まで育てる種苗生産や、干潟に砂利を入れた網袋を置きアサリ稚貝を効率よく採集する「網袋採苗」などがある。また稚貝から成貝に育てる技術として、稚貝を育てる場所に網をかぶせることで、波浪による散逸やクロダイなどの捕食動物から稚貝を守る「かぶせ網」の手法、コンテナに稚貝を入れて、餌となる植物プランクトンが豊富な海中に吊り下げる「垂下養殖」がある。また、エビ養殖場でアサリと一緒に育てる複合養殖の研究にも取り組んでおり、クルマエビの残餌や排泄物を栄養として増殖した植物プランクトンが、アサリの餌となることが分かった。アサリ養殖はまだ始まったばかりで、労力やコストの問題など、解決すべき課題はたくさんあるが、美味しい国産アサリを日本の食卓に届けられるよう、試験研究データを積み重ねている。



主要二枚貝類の国内生産量
海面漁業生産統計調査(農林水産省)をもとに作成



(上段) 砂利を入れた網袋でアサリ稚貝を育てる網袋採苗
(下段) コンテナにアサリを入れて筏から吊り下げる垂下養殖